

大学史ニュース

第12号

2017年3月3日 発行

目次

調査報告

- ◇戦時中の陸上競技部員・杉山繁雄の資料調査…… 2
- ◇学徒兵ゆかりの地－津市香良洲歴史資料館－…… 6

連載

- ◇キャンパスになった軍用地②…… 4



学祖篆額「木村藹吉君碑」

最勝院の木村藹吉碑

弘前市にある津軽真言五山の名刹金剛山光明寺最勝院に建つ木村藹吉碑には、山田顕義の篆額「木村藹吉君碑」が刻まれています。撰文は、漢学者で宮内省四等出仕の川田おうこう瓊江（本名は剛）。建立年は、顕義が司法卿（明治18年12月22日から司法大臣）で従三位（明治17年12月27日叙位）と記されているので、明治18年とみられます。

木村藹吉（1840～1879*）は弘前藩士の家に生まれ、江戸で西洋砲術を学び、藩軍制の西洋式への改革を推進しました。「戊辰戦争」では大隊長として弘前藩兵を指揮し、「箱館戦争」で腕を負傷。その後、兵部省に出仕しました。西南戦争では、藩校稽古館を引き継いだ東奥義塾の塾生を率いて出撃しましたが、途中で終戦となり帰郷しました。

顕義と木村との関係は詳らかではありませんが、「戊辰戦争」や兵部省時代に関わりがあったと考えられます。

*没年は明治14(1881)年説もある。



最勝院境内の五重塔（国指定重要文化財）

戦時中の陸上競技部員・杉山繁雄の資料調査

広報課では、このほど在学中陸上競技部に所属し、卒業後出征した杉山繁雄の資料調査を実施しました。調査では、弟の杉山彬氏と長女の村山節子氏からの聞き取りと、節子氏所蔵の写真アルバムなどを撮影しました。

繁雄は、大正7(1918)年、山形県山形市に7人兄弟の長男として生まれました。昭和14(1939)年4月に日本大学予科に入学し、昭和18年9月に法文学部政治経済学科を卒業しました。在学中は長距離選手として関東インカレ、日本インカレ、奥多摩溪谷往復駅伝、青梅駅伝、箱根駅伝などで活躍しています。なかでも、昭和18年に開催された、「紀元二千六百三年靖国神社・箱根神社間関東学徒鍛錬継走大会」(以下、第22回箱根駅伝)では、第5区で4人を抜き2位で箱根神社にゴールし、順位を優勝圏内に引き上げました。卒業後は弘前の野戦重砲兵連隊に

入隊し、満州に渡りました。幹部候補生としての訓練を受けている時に敗戦となりました。その後、シベリアに抑留され2年余のあいだ強制労働を余儀なくされました。

彬氏や節子氏によると、箱根駅伝や戦争体験について、自から話すことは、なかったといいます。節子氏が父のシベリア抑留について詳しく知ったのは、彼女の依頼で『文京の教育』(第242~245号)に、繁雄が「シベリヤ抑留記」(その1~4)を執筆した平成3(1991)年とのことでした。

箱根駅伝について詳しく知ったのは、山形県校友会から会報『絆(きずな)・やまがた』(第14号)に、箱根駅伝の思い出の執筆依頼を繁雄が受け、節子氏がその口述筆記を行った平成18(2006)年とのことです。また、彬氏によると、平成10年1月に、繁雄の「箱根駅伝・今昔物語」(日本テレビ)が放映されるのを機会に、繁

雄を含む兄弟3人が芦ノ湖畔に泊まり、箱根駅伝の復路スタートを見に行きましたが、この時

も、繁雄は当時の駅伝のことはほとんど話さなかったとのことです。しかし、胸中は往時を偲び、感慨深いものがあったのではないかと推察されます。

節子氏が所蔵しているアルバム(1冊)には、総数60余葉の写真が収められています。第22回箱根駅伝の写真が多いですが、繁雄の肖像写真(予科時代)、ピクニック、阿佐ヶ谷の合宿所、長野県松本市の合宿、各種大会、学校教練などの写真もあり、陸上競技部の活動や学生生活の様子が窺えます。また、森本一徳駅伝コーチの「最初的一步と最後の五分」の言葉が、細長い用紙に大きな字で書かれ、アルバムに折り込まれていました。この他の資料は、箱根駅伝写真の解説とエピソード、第22回大会の第7区を走り、戦死した山手学選手の兄に宛てた手紙の控、陸上競技部



箱根にゴールする杉山選手
(村山節子氏蔵)



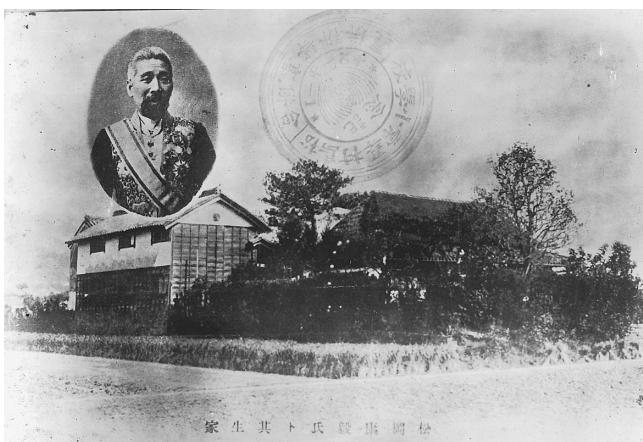
出征中の杉山繁雄
(村山節子氏蔵)

OB会に関するものなどです。出征に関する資料は、写真1葉と前記「シベリヤ抑留記」以外はありませんでした。

なお、繁雄の箱根駅伝やシベリア抑留については、昨年刊行された澤宮優氏の『昭和18年幻の箱根駅伝—ゴールは靖国、そして戦地へ—』（河出書房新社）に詳しく述べられていますので、参考にしていただきたい。

(小松)

寄贈資料 松岡康毅の生家と葉山別荘の写真



松岡康毅の生家

初代総長松岡康毅の曾孫三島昌子氏から、松岡の徳島県上板町の生家と葉山別荘の写真2葉の寄贈を受けました。これらは、『松岡康毅先生伝』に掲載されていますが、広報課では、いずれも所蔵していませんでした。

生家の写真は、絵はがきになっていて、「松岡康毅氏ト其生家」の説明があり、肖像写真が掲載されています。さらに、「松島村尋常小学校／合併高等科併置」のスタンプが押されています。いずれも、『松岡康毅先生伝』の写真にはないものです。

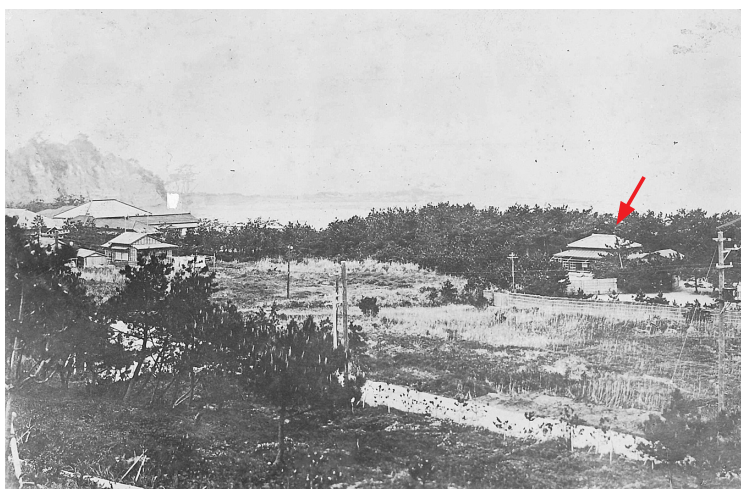
生家の撮影年については不明ですが、引野尋常小学校と七条尋常小学校を統合し、高等科を併置して

松島尋常高等小学校となったのは、明治42（1909）年のことです。現在、松島小学校の校長室には、松岡の扁額「一日難再晨」（陶淵明の古詩）が掛けられています（本誌第5号参照）。

葉山別荘は、長者ヶ崎近くの風光明媚なところにありました。葉山御用邸の南邸馬場（現葉山公園）の近くでもあり、その一部は現在は日本私立学校振興・共済事業団の宿泊施設「相洋閣」となっています。この写真は『松岡康毅先生伝』では「昭和8年現在」と記されています。写真正面向かって右側の建物が葉山別荘で、海岸側の防風林を背にして建てられています。左奥に見える大きな屋根が長者園です。長者園は割烹旅館ですが、天皇行幸などのお供をする人たちの宿泊所ともなっていました。昌子氏も葉山別荘に行くとこの旅館に泊まったとのことでした。

松岡は釣りが好きで、この別荘を頻繁に訪れました。不幸にして大正12（1923）年の関東大震災では、ここで罹災し亡くなりました。

(小松)



葉山別荘（矢印）

キャンパスになった軍用地②（静岡県三島市）



昭和20年代の第1野戦重砲兵旅団跡地
(黄枠内第3連隊跡、下=東隣：赤線までが第2連隊跡で
中央から北側にかけて日本大学、上=西隣：練兵場跡)

町・北上町・長泉町の土地の買収交渉は完了していました。多数の人馬を有する砲兵部隊の常駐は、周辺農民にとっては、肥料用の糞尿や残飯の払い下げ、生産作物の大量買い上げといった利点がありました。また、兵士たちの娯楽や遊興などで町は潤うこととなります。

大正8年11月1日第2連隊（現在の日大通りの東側、以降部隊名称の野戦重砲兵は略す）が、9年11月5日に第3連隊（同西側）が移駐を終え、第1旅団は終戦まで同地にありました。戦後、兵営には4ヵ月余り進駐軍が駐屯し、その後も連合軍が管理していました。



日本大学三島高等学校北側の第2連隊軍用地境界塀

要塞砲兵を起源とする重砲兵は、第一次世界大戦末期の大正7（1918）年に野戦重砲兵を分化。陸軍の装備近代化の一環として、同年12月に野戦重砲兵第1旅団が編成され、野戦重砲兵第2連隊（神奈川県横須賀）・同第3連隊（和歌山県深山及び兵庫県由良）を傘下に置きました。射程の長い重砲の演習には富士裾野演習場が最適であり、近隣に衛戍地（駐屯地）を置くことが検討され、三ヶ所の候補地の一つが三島町でした。

東海道の宿場町であった三島町は、東海道線の開通時にはルートから外れていたため、往時の繁栄は見る影を失っていました。そのため、移駐には積極的に応じ、誘致決定から2週間後には、三島



第2連隊将校集会所
(移築され国際関係学部記念館となっている)

終戦後、現在の文理学部の敷地にあった日本大学世田谷予科は、一部の校舎が焼失し、学徒の復員などもあって施設が不足していました。候補地を探した結果、日本政府に返還予定の第2連隊跡地の払い下げを申請しました。昭和21（1946）年5月、使用可能な第3連隊の南側の兵舎を借用し、6月15日に三島予科を開校しました。旧軍用地が返還されると、払い下げの配分について三島市や国鉄と協議がなされました。日本大学には第2連隊北側の敷地と建物が払い下げられ、22年3月に引っ越



第2連隊正門
(現三島市立北中学校正門)

うやく1校の新設が予算化され、翌年になって政府から第3連隊跡地と建物の一部の使用が認められました。三島市立北小学校の設置認可は24年8月で、11月に開校しました。28年4月には、敷地内に三島市立北幼稚園が開園しました。

幼稚園の南側は静岡県立三島北高等学校です。同校は明治34



静岡県立三島北高等学校の校庭に残る
陸軍時代の桜樹

年の高等女学校でした。郡制廃止にともない大正11年4月に静岡県に移管されました。開校時の校舎は、現在楽寿園となっている小松宮別邸の一部を借用していましたが、大正13年に宮町に移転しました。

昭和23年4月新製の静岡県立三島第一高等学校に改編され、1年後に男女共学となり、現校名に改称しました。31年、第3連隊跡地に新校舎を建設し、32年5月に移転しました。新築の本館以外は旧兵舎を使用し、プールには馬洗場が当てられました。第3連隊跡地は、他にJR東海総合研修センターや三島税務署、静岡県立三島長陵高等学校などとなっています。

し、4月8日に新校地で入学式が行われました。

三島予科は、昭和24年4月の新制大学発足により三島教養部に改編、33年1月の文理学部設置に際して同学部三島校舎となり、53年12月には国際関係学部が設置されました。また、25年3月に短期大学経済科、32年12月に日本大学三島高等学校が設置されています。

第2連隊の南側には、昭和22年4月に新製の三島市立第二中学校が設置され、27年4月に三島市立北中学校と改称しました。同校の正門は、現在も陸軍時代のままですが、当初日本大学側には門がなく、26年10月に正門を造るまでは、その門を使用していました。

昭和初期、三島市の旧市街地には東西南3校の小学校がありましたが、戦時体制下、学童数の増加に対応する予算上の余裕がありませんでした。昭和23年11月、よ



三島市立北幼稚園前の
「野戦重砲兵第三連隊兵営址」碑



旧練兵場跡地に建つ(株)東レ三島工場

昭和31年8月、新工場の用地を探していた(株)東洋レーヨン(現東レ)は第3連隊西側の練兵場跡地への建設を決定し、33年3月に三島工場を設置しました。また、第2連隊南東にあった衛戍病院(昭和11年11月に陸軍病院と改称)の跡地は、市民体育館となっています。

本調査にご協力いただきました、三島市立北中学校、三島市立北幼稚園、静岡県立三島北高等学校、三島市郷土資料館(訪問順)の関係者の皆様に謝意を表します。

(高橋)

【参考文献】

三島市誌編纂委員会編『三島市誌』中・下巻(三島市、昭和34年5月)
 長泉町郷土誌増補版編さん委員会編『長泉町史』下巻(長泉町・長泉町教育委員会、平成4年3月)
 荒川章二編『軍隊と地域』シリーズ 日本近代からの問い⑥(青木書店、平成13年7月)

学徒兵ゆかりの地—津市香良洲歴史資料館—



三重海軍航空隊正門
(左後が津市香良洲歴史資料館)

平成28年11月9日、三重県の津市香良洲歴史資料館で学徒兵関係の調査を実施しました。同館は、海軍飛行予科練習生(下士官搭乗員の養成課程)出身者たちが創った施設「若桜会館」の運営を、平成10年に香良洲町(当時)が引き継ぎリニューアルし、同町と津市との合併を経て平成24年4月に2度目のリニューアルオープンをしています。

場所は三重海軍航空隊跡地の一郭にあり、当時の正門が移築されています。同隊では、第13期海軍飛行専修予備学生(昭和18年10月～)と第2期海軍飛行専修予備生徒(昭和19年8月～)が基礎教育を受けていますが、本学出身者の資料は発見されま

せんでした。

昭和18(1943)年9月に採用された海軍予備学生は、三重海軍航空隊か土浦海軍航空隊に仮入隊して、飛行適性検査などを受けました。合格者約5,500名(内 日本大学出身者318名)は第13期海軍飛行専修予備学生として採用され、両航空隊で海軍士官となるための教育を受けました。三重海軍航空隊の日本大学出身者には、星野正雄(法文学部)などの学生に加えて、教官にも第1期海軍航空予備学生だった荻野益男海軍大尉がいました(本誌第9号参照)。

(高橋)



三重海軍航空隊での予備学生(前列左端星野正雄、右端写真所蔵者の池田一彦氏)

山田顕義生誕地の異説について

山口県萩市の顕義園は、日本大学90周年にあたる昭和54（1979）年に開園されました。これまで、日本大学ではこの地を山田顕義（以下、顕義とする）の生誕地として顕彰してきたのですが、最近、少し異なる説が確認されたので、細かい話となりますが紹介したいと思います。

『山田顕義伝』は、顕義に関する最も詳細な伝記で、昭和38年に刊行されました。この中で、顕義の生誕地は次のように記されています。

「山田市之允顕義は弘化元年（1844）10月9日、長門国阿武郡萩町の郭外松本村の鍛冶ガ原（現在山口県萩市椿東中の倉）に、呱呱の声を挙げた。」（『山田顕義伝』7頁）

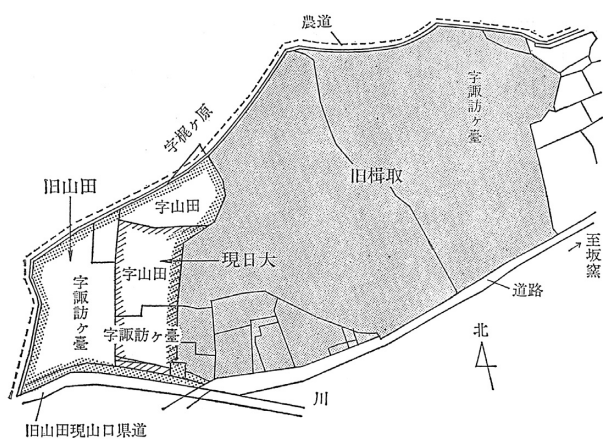
「山田市之允顕義の生地松本村は萩の城下町から、松本川をへだてた東の郊外で、藩が下士に与えた半士半農の村である。鍛冶ガ原は松本村の外れ、原とはいうものの唐人山の山裾、小流れの両岸に沿うて田圃が段々をなして拓けている所である。（中略）昭和34年11月、巨大な山田顕義先生頌徳之碑が建立されて、山田という自然の呼称は永久に残るであろう。」（同書9頁 注：顕義園付近には小字名として「山田」という地名が存在していた）

ここでは、顕義は松本村の鍛冶ガ原^{かじがはら}というところで誕生し、その地に日本大学70周年を記念して頌徳碑が建立されたことが記されています。この頌徳碑は顕義園の地に建立されており、同所は中ノ倉という地域です。「鍛冶ガ原」という地名が気になりますが、ともかく、顕義園の地が生誕地とされています。

その後、昭和54年の顕義園開園とほぼ同時期より、日本大学の広報誌『桜門春秋』で高梨公之国際関係学部長（当時、後に日本大学総長）を交えた対談が開始され、学祖山田顕義顕彰の気運が高まりました（後に『シリーズ学祖・山田顕義研究』全7集として刊行）。この対談の中で顕義の生誕地についても議論が及び、中原静子氏（萩女子短大教授、当時）の調査により、顕義園の地は明治23年になって顕義が取得した地であることがわかり、さらに「梶ヶ原」という地名は、顕義園の北西に隣接している土地であることがわかりました（添付図）。萩藩（長州藩）は文久3年（1863）に萩から山口へ政庁を移したため、萩の山田家の土地も一旦は手放したと考えられます。

しかし、明治23年に顕義が買い取った土地であるため、ひょっとしたら縁の無い土地なのではとの疑問が生じました。その後、中原氏のさらなる調査により、文久2（1862）年の分限帳に顕義の家が「中倉」（中ノ倉）と記されていることから、少なくとも文久2年以後は、顕義園の場所に顕義が居住していたことが判明しました（『シリーズ学祖・山田顕義研究』第7集）。また、これ以前の山田家の居住場所を特定できる資料が確認できないため、顕義園は顕義の生誕地であることがほぼ確定的であるとされ、今日に至っています。

さて、昭和38年に刊行された『山田顕義伝』ですが、実は同書を編纂するに際して基礎文献となる資料がありました。顕義の親戚で歴史家の村田峰次郎（1857-1945）が執筆した『空齋山田伯伝』という本です。これはタイプ打ち（一部は筆書き）の和装本で、書籍として刊行されず山田家に保管されていたもので、昭和60（1985）年に日本大学へ寄贈されました。この『空齋山田伯伝』は、著者が顕義とほぼ同時代を生きた村田峰次郎であり、さらに山田家が戦災の被害を受ける以前（戦前）に編まれた本であるため、当時の山田家に残された豊富な資料で執筆されている可能



顕義園周辺図（『シリーズ学祖山田顕義研究』第4集86頁）

性があります。同書の資料的価値を考え、当課発行の『覺誌』で今年度から数回に分けて翻刻作業を進めていく予定です。

冒頭のタイトルにもある顕義生誕地の異説ですが、実はこの『空齋山田伯伝』に記されていました。まずはその箇所を紹介します。

「最初君は幼児に於ては誕生地たる長門萩城外の松本村梶ケ原（もと鍛冶ケ原なるべし、金鑄原や鑄物師に接す）の家に在りしが、それより同村中ノ倉（東光寺峠の下にして坂高麗左衛門の陶工場に近し）の家に移れり。君が明倫館また松下村塾に通学して日夜文武の課業に勉励せしも、みな此の中ノ倉の家にありし時なり」

（句読点、濁点は引用者が付した）

この記述によると、顕義は松本村「梶ケ原」に誕生し、その後、顕義園のある「中ノ倉」に移ったとあります。また、松下村塾に通学していた時期は「中ノ倉」に住んでいたとも記載されています。村田峰次郎は、顕義とは又従弟で、多くの長州出身者の伝記を編纂している人物です。戦前期のタイプ印刷であるため、本書には多くの誤植はありますが、この記述についてはかなり信憑性が高いのではと思います。つまり、この記述を見た『山田顕義伝』の編者が、顕義の生誕地を「鍛冶ケ原」＝「中ノ倉」として記載し、その後は顕義園の土地（中ノ倉）に顕義が居住していたかが焦点となり、移転をしたという村田峰次郎の記述が抜け落ちてしまっているのです。

それでは、「鍛冶ケ原」とはどこになるのでしょうか。中原氏の地図によると顕義園の隣接地が「梶ケ原」であるとのことですが、村田峰次郎の記述（もと鍛冶ケ原なるべし、金鑄原や鑄物師に接す）について萩博物館の道迫真吾主任学芸員に尋ねたところ、金鑄原という地名について興味深いご教示をいただきました。それは、『松下村塾をめぐりて』という書籍の中にある図で（掲載図）、これによると、松陰神社の南（本図では右側）に「⑨金鑄原鑄造所跡」という場所があります。村田の記述によると「鍛冶ケ原」は金鑄原に接していたと解釈できるので、この金鑄原の付



松本村付近の図（『松下村塾をめぐりて』85頁）

近、現在でいうと伊藤博文旧宅跡の向かい側付近に顕義の生誕地があったとも考えられます。この金鑄原鑄造所では、大筒や青銅の大鳥居が鑄造されたようで、後に現在の松陰神社の北西側に移転しました（現在の郡司鑄造所遺構広場付近）。

現在までのところ顕義園（中ノ倉）より以前の顕義の居住地に関する資料は確認できていないため、村田峰次郎の記述を裏付けることは難しいのが現状です。また、仮に村田の記述どおり顕義園以外に生誕地があったとしても、顕義園の場所は顕義にとっては思い入れのある場所であり、そのことは明治23年になってから土地を取得していることでも明らかです。松下村塾に通っていた頃にはすでに顕義園の地に住んでいたということは、顕義にとって顕義園の地こそ、多感な少年時代を過ごした思い出の地であることに変わりはありません。

ただ、村田峰次郎という歴史家が残した情報をそのまま埋もれさせておくには忍びないと思い、今回紹介させていただきます。今後も『空齋山田伯伝』の翻刻作業を進め、学祖と同時代に生きた歴史家村田峰次郎の声を汲み取りながら、学祖山田顕義の事蹟を掘り起こしていきたいと思えます。

（松原）

【参考文献】

『山田顕義伝』（日本大学、昭和38年7月）

『シリーズ学祖・山田顕義研究』第1集～第7集（昭和54年～平成13年、日本大学）

福本義亮『松下村塾をめぐる』（昭和32年 復刻版：マツノ書店、平成10年6月）

三軒茶屋キャンパスでの大学史展示

平成28年11月5日～6日、危機管理学部、スポーツ科学部がある三軒

茶屋キャンパスで大学史企画展示「三軒茶屋キャンパスと日本大学」を開催しました。

学園祭「三茶祭」と合わせた展示のため、地域住民や校友

など多くの方が見学されました。今回の展示では、学祖山田顕義の展示のほかに、日本大学とスポーツ、日本大学と危機管理、三軒茶屋キャンパスの歴史などを展示しました。

三軒茶屋キャンパスは、生物資源科学部が藤沢キャンパスへ全面移転してから15年、昨年ふたたび学生が使用することとなりました。来場者の方には、生物資源科学部（農獣医学部）が三軒茶屋キャンパスを使用していた当時の航空写真や平面図が好評でした。とくに近隣の方は、古いキャンパスの航空写真を見て、自分の家が写っていると喜んでいました。大学史資料は、近隣に住む方にとっても有益な資料であることをあらためて感じることができました。



展示風景



展示ポスター

創立者本多康直の出自再考



3 本多忠貫肖像(8頁)

本多康直(『旧伊勢神戸藩主本多家史料』口絵)より
キャプションが「本多忠貫肖像」となっているが誤りであろう。明治20年前後の頃の撮影か。

日本法律学校創立者の一人本多康直は、安政3(1856)年、伊勢神戸7代藩主本多忠廉(忠寛)の子に生まれ、近江膳所藩主本多康穰(14代)の養子となったのですが、家督を相続して15代目当主にはなりません。その事情を『日本大学百年史』は、「康直が父に先立って三十三年一月に病没したあと、侯爵伊達宗徳(旧伊予宇和島藩主、貴族院議員)の次男康虎(元治元年六月生まれ)が養子に迎えられて本多家を継いだ」(第一巻304p)と記述しています。

ところが、『平成新修旧華族家系大成』(霞会館華族家系大成編輯委員会編 平成8年)の「本多康忠」(子爵。近江膳所)を見ると、「康直 本多(神戸) 忠廉二男 安政三、四、一一生、明治二〇、一一、二九離」と記されているのです。康直の親元である「本多康彦」(子爵。伊勢神戸)には、「康直 本多(膳所) 康穰養子(離)、大審院判事 安政三、四、一一生、明治三三、一、二九没」とあります。

これらのことから、康直は明治20年11月に養家を「離」れていたことが分かります。「離」が「離縁」あるいは「離籍」のことなのか、また、その理由なども分かりません。

本多康直が生まれた伊勢神戸藩(三重県鈴鹿市)に関する資料に『旧伊勢神戸藩主本多家史料』(若林喜三郎編、大手前女子大学史学研究所 昭和63年刊)があり、康直の父で7代目藩主忠廉の経歴が収録されていますが、子女として5人の名前が記されています。順番にまとめてみます。

- 1 某 健五郎 嘉永6年2月3日生(江戸)、安政元年10月20日卒(神戸)
- 2 女子 儔 安政元年12月生(江戸)〔後欠〕
- 3 某 恒弥 安政3年4月12日生(江戸)〔後欠〕
- 4 忠穆 溝口直溥弟 文政13年9月20日生、安政3年9月22日卒(江戸)、27歳
- 5 忠貫 (養子)

1番目の健五郎が長男ということになりますが、わずか1歳半ほどで夭逝してしまいます。2番目の儔は、成長後稲垣長敬(鳥羽藩主)夫人となる文子と思われ。そして、3番目の恒弥が康直のことです。「某」とあるのは、この文書が作成されたのが安政年間で、まだ生まれたばかりの康直の実名が決まっていなかったからと思われ。4番目の忠穆は、康直が誕生する前に忠廉の跡継ぎとして養子に迎えられましたが、安政3年に27歳で急逝しています。5番目の忠貫が、養子に迎えられ相続することになります。

さて、康直ですが、幼名に「恒弥」とありますが、康直の父忠廉の幼名も「恒弥」と資料に記されているのです。康直は2男ではありますが、本多家を継ぐ身として名付けられたのです。しかし、結果的に忠廉は戸沢正令の2男忠貫を養子に迎え本多家を相続させました。康直が膳所本多家の養子となった年月が分からないので推測になりますが、忠穆が死去したことがヒントになるかもしれません。

忠穆が養子として本多家に入ったのが安政3年8月のことでしたが、直後の9月22日に急逝してしまいます。このとき、康直は生まれて4ヵ月ばかりの幼



賞 忠 多 本 位 五 能
成八十四 主藩伊勢元 侯家名永東
明治12年頃の忠貫の肖像写真(48歳)
『収蔵品目録写真 明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」より

児で後継者たりえません。そこで同4年2月、忠廉は戸沢正令の2男忠貫を再養子として幕府に願出て許可され、4月、忠貫は本多家8代目藩主となり、忠廉は隠居し、本多家の存続は確定したのです。

一方、膳所藩主本多康穰は当主であり続け、養子とした康直が明治20年に家を出たことで、伊達康虎が養子に入り、明治45年康穰の死去にともない本多家を相続したのです。

明治20年といえば、康直は11年間にわたるドイツ留学から帰国して司法省参事官に就任、法律取調委員を拝命し、また民事訴訟法・裁判所構成法の起草に従事するなどした時期です。その後、本格的にドイツ学を習得した逸材として期待され、日本法律学校創立にも参画し、教育・運営にも積極的に関わっていきます。そうした人生進路と華族の跡を継ぐということが、康直の中で相容れないものだったのでしょうか。

(田淵)

全国大学史資料協議会2016年度総会ならびに全国研究会

平成28年10月6日～8日、全国大学史資料協議会の総会・全国研究会が広島大学東広島キャンパス学士会館を会場に開催されました。初日の総会終了後は、広島大学文書館長小池聖一氏による「森戸辰男にみる学問の自由と大学の自治」と題した講演が行なわれました。

2日目の全国研究会では、今年度は「キャンパス形成史」のテーマで、椿田卓士氏（東海大学学園史資料センター）「東海大学湘南キャンパスの「記憶」～キャンパスの形成と大学史資料～」、塚本俊明氏（広島大学産学・地域連携センター）「キャンパスを計画する～日本建築学会 大学・地域デザイン小委員会の取り組み～」、奈良英久氏（立命館



史資料センター）「学園アイデンティティ醸成のためのキャンパス模型—何も残っていないから、目的を特化して再現する—」、佐伯裕加恵氏（神戸女学院史料室）「重要文化財神戸女学院（岡田山キャンパス）」4本の報告があり、総括討論では活発な論議が行なわれました。

全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国（三重）大会及び研修会



「フレンテみえ」での研修

研修では、博物館の施設見学と「アーカイブス入門—組織におけるアーカイブスの役割」「展示照明としてのLEDを考える」「大宰府市における行政文書の保存と公文書館の役割」「伊勢商人長谷川治郎兵衛家資料調査の概要」の4本の報告がありました。

他に、「学校アーカイブズと地域の組織・団体アーカイブズの保存」「アーカイブズ・レスキュー活動のネットワーク」「日本におけるアーキビストの職務基準」といった報告があり、現在注目されている問題が多く取り上げられ、有意義な会でした。

平成28年11月10日・11日、第42回全史料協全国（三重）大会が、「博物館でアーカイブズ」をテーマに、男女共同参画センター「フレンテみえ」、三重県総合博物館（MieMu）を会場に開催されました。平成26年4月に開館した三重県総合博物館は、設立準備の段階から博物館機能と公文書機能を主要業務と位置づけた博物館であることから、同館のあり方が大会テーマの中心となりました。

研修では、博物館の施設見学と「アーカイブス入門—組織における



三重県総合博物館 基本展示室

大学史に関する情報については下記までお寄せください

日本大学企画広報部広報課（大学史） E-mail:nuhistory@nihon-u.ac.jp
TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592

活動報告

平成28年4月～平成28年9月
（大学史に関する活動）

○調査研究等

- 5月9日 駒場学園高等学校及び周辺での陸軍獣医学校関係史跡調査（東京都世田谷区）
5月26日 全国大学史資料協議会東日本部会総会（東京農業大学）
6月3日 全史料協関東部会総会（ミュージア川崎）
6月3日～4日 学徒兵関係史跡・聞き取り調査及び戦前の陸上競技部に関する寄贈資料の受け取り
（大阪府大阪市・兵庫県西宮市及び神戸市）
6月23日 成城学園教育研究所での上條慎蔵関係資料調査（東京都世田谷区）
7月22日 全史料協関東部会第286会定例研究会
（長岡震災アーカイブセンターきおくみらい・長岡市立中央図書館）
7月30日 上條慎蔵関係資料調査（長野県松本市）
8月31日～9月2日 学祖山田顕義関係資料調査（山口県萩市・山口市）

○展示・普及

- 4月25日～8月28日 法学部図書館「学祖山田顕義と日本大学を知る」展（同学部図書館1Fギャラリー）
7月17日 商学部オープンキャンパス「日本大学を知ろう～学祖山田顕義を学ぶ～」展
（同学部3号館2F講堂前フロア）

○講演

- 4月6日 日本大学理工学部（同学部スポーツホール）
4月11日 日本大学東北高等学校（磐梯熱海温泉「華の湯」）
4月12日 日本大学豊山中学校（同校アリーナ）
4月22日 危機管理学部（三軒茶屋キャンパス1310教室）
5月7日 日本大学鶴ヶ丘高等学校（同校体育館）
5月17日 スポーツ科学部（三軒茶屋キャンパス1310教室）
5月25日 日本大学豊山高等学校（同校アリーナ）
7月29日 付属高等学校等3年次教員研修会（日本大学会館）
9月12日 法学部教職員研修会（同学部本館2F会議室）

N. 日本大学大学史ニュース

第12号

2017年3月3日 発行

編集・発行 日本大学企画広報部広報課
〒359-0003 埼玉県所沢市中富南4-25
TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592

印刷 株式会社 文成印刷

(2017.3.3 11000)